

スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識と 実施経験の関係

桑重千聖¹⁾、上地広昭¹⁾

Relationship between Gender Stigma Consciousness and Participation in Sports

Chisato KUWASHIGE¹⁾, Hiroaki UECHI¹⁾

抄録

本研究の目的は、スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識を測定するための尺度を開発し、ジェンダー・スティグマ意識と各種目の実施経験の関係を明らかにすることであった。中国地方の大学生 330 名 (男子 153 名、女子 177 名) を対象にインターネット調査を行った。主成分分析の結果、スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の項目として単一成分の計 6 項目が明らかになった。また、尺度の内部一貫性は $\alpha=0.82$ であり十分な信頼性が確認された。次に、スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の得点について、性別とスポーツ種目の実施経験の有無を独立変数とする二元配置の分散分析をスポーツ種目 (17 種) ごとに行った結果、野球と陸上競技において有意な交互作用が認められた。野球と陸上競技の 2 種目については、実施経験のない女子は実施経験のある女子に比べてジェンダー・スティグマ意識が高いことが明らかになった。これらの結果から、一部のスポーツ種目においてジェンダー・スティグマ意識を解消していくことが女性のスポーツ実施率を上げることにつながる可能性が示唆された。

KEY WORDS: 女性スポーツ、性差、ステレオタイプ

1) 山口大学教育学部 〒753-8513 山口県山口市吉田 1677-1
Faculty of Education, Yamaguchi University, Yoshida 1, Yamaguchi, 753-8513 Japan

緒言

スポーツ庁 (2021) によれば、現在、わが国における「週一回以上のスポーツ実施率」は 59.9%とされる。直近 30 年間のスポーツ実施率の推移を概観すると、平成 3 年度が 27.8%、平成 12 年度が 37.2%、平成 24 年度が 47.5%と国民の高齢化に伴う健康意識の高まりを背景に順調に増加傾向を示している。ただし、令和 2 年度における、男性の週一回以上のスポーツ実施率が 61.8%であったのに対して、女性の実施率は 58.3%であり、近年、女性のスポーツ実施率は男性に比べてやや低い傾向を示すようになってきている。このスポーツ実施率の性差は若年層 (10-30 歳代) において特に顕著であり、現在、女性のスポーツ参加を促すための方策に関心が寄せられている。

スポーツ庁 (2021) は、「第二期スポーツ基本計画」の中で、スポーツを通じた女性の活躍促進を重要な施策の一つに位置付け、女性スポーツに関わる各領域の専門家を集め検討を重ねてきた。その結果、女性のニーズにあった女性が参画しやすい環境・機会の提供や女性指導者・アスリートを増やすための方策など、女性のスポーツ参加促進に向けた積極的な取り組みを行うことを決定している。

この女性の積極的なスポーツ参加促進に関わる問題は、日本だけに限らず他の先進国においても見られる。たとえば、英国のスポーツ団体「Sport England」(2021) は、女性のスポーツ参加を促すための原則・方策を掲げており、その中で、女性のスポーツ参加を妨げている要因 (バリア要因) についても言及している。それによると、女性のスポーツ参加を妨げている要因の一つに「スポーツに関わるイメージ」があることが指摘されている。つまり、スポーツが持つ「競争的」で「攻撃的」なイメージが「女性らしくない」と捉えられ、女性にスポーツへの参加を躊躇させているのではないかと述べられている。これは、スポーツ参加に「ジェンダー・バイアス」が関わっていることを示している。

スポーツ参加とジェンダーの関係については、Schmalz & Kerstetter (2006) による先行研究がある。彼女らは、米国の小学三-五年生を対象に、ジェンダーに関するスティグマ意識 (ステレオタイプ通りに振る舞うことへの他者からの期待に対する意識) を測定し、児童の「男性らしいスポーツ」と「女性らしいスポーツ」への参加に対する影響を検討してい

る。その結果、ジェンダーニュートラルな (性差のない) スポーツ種目については、男女ともに高い参加率を示したが、性別特有 (男性らしい、女性らしい) と認識されているスポーツ種目については男女間で参加率に差が見られた。また、ジェンダーに関するスティグマ意識は、「女性らしいスポーツ」への参加と負の関係があることが示され、「男性は男性らしいスポーツをすべき」という周囲からの期待を感じている男子ほど、ダンス、バレエ、チアリーディングなどの「女性らしいスポーツ」への参加率が低いことが報告されている。このことから、スポーツに関するジェンダー・スティグマ意識を変えていくことが、これまでジェンダー・バイアスによって回避されてきたスポーツへの参加を促す一助となる可能性が伺える。

そこで、本研究では、研究 I において、スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識を測定するための尺度を開発し、研究 II において、様々なスポーツ種目に関するジェンダー・ステレオタイプを明らかにした上で、スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識と各種目の実施経験の関係を明らかにすることを目的とする。

研究 I スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の開発

1. 目的

研究 I では、スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識の程度を測定するためのスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の開発を目的とする。また尺度の信頼性についても検証を行う。

2. 方法

1) 調査対象

中国地方の A 大学に在籍する大学生 330 名 (男子 153 名、女子 177 名、平均年齢 \pm SD = 19.73 \pm 1.65 歳) を対象に Google フォームを用いたインターネット調査を行った。

2) 調査内容

スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識の程度を測定するために、Pinel (1999) の尺度を参考に

「親や友人は男の子は男の子らしいスポーツや遊びをするべきだと考えていたと思う」「女の子っぽいスポーツや遊びをする際、親や友人の視線が気になっていた」「女の子っぽいスポーツや遊びをしていたら、親や友人に変わり者だと感じられていただろう」(以上は男子用)など六項目を男女別に準備した。これらの項目について、小学生時代を回想してもらい回答を求めた。回答形式は「まったく当てはまらない (1)」から「非常に当てはまる (5)」の五件法を採用した。

3) 調査期間

インターネット調査は、令和3年6月中旬から下旬にかけて実施した。

4) 分析方法

スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の構造を明らかにするために主成分分析を行った。尺度の信頼性については、クロンバックの α 係数を算出することによって内部一貫性を検討した。なお、本研究では、統計解析ソフト SPSS Statistics 25 (IBM 社製) を用いて統計解析を行った。

5) 倫理的配慮

本研究の倫理については、A 大学人一般審査の承認を得た (管理番号 2021-009-01)。本調査への回答は自由意志に基づくこと、回答内容と成績には一切関係がないこと、途中での回答中止が可能であることを教示文で示し、同意した者のみに回答を求めた。

3. 結果・考察

スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識に関する項目について主成分分析を行った結果、成分の解釈可能性の観点から、単一の成分が適切であると判断されたため、単一成分六項目をスポーツ・ジ

ェンダー・スティグマ意識尺度の項目とした (表1 参照)。また、本尺度の内部一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を求めた結果、 $\alpha=0.82$ であった。この結果から、本尺度の内部一貫性は十分であると判断した。

先行研究として Pinel (1999) が女性のスティグマ意識尺度を開発しており、研究 I ではその尺度を参考に男女兼用のスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度を開発した。両尺度の相違点として、まず項目数が挙げられる。Pinel の尺度が 10 項目であったのに対して本尺度は六項目に収まった。この項目数の違いは、Pinel の尺度が女性に関わる全般的なステレオタイプについてのスティグマ意識を測定するものであったのに対して、研究 I ではスポーツ場面に限定したスティグマ意識を測定する尺度を開発したことによる。今回開発した尺度は極めて限定的な場面を測るものであり、使用時の簡便性を考えると六項目というのは回答者の負担も少なく妥当な数といえる。

研究 II スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識と実施経験の関係

1. 目的

研究 II では、各スポーツ種目のジェンダー・ステレオタイプ (男性らしい、女性らしい、中性的) を明らかにした上で、ジェンダー・スティグマ意識と実施経験の関係を検証する。

表1 スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の主成分分析

項目番号	項目内容	成分負荷量	共通性
3	私が女の子っぽいスポーツや遊びをする際、親からの視線が気になっていた。	0.82	0.67
6	私が女の子っぽいスポーツや遊びをしていたら、友人は私のことを変わり者だと感じていただろう。	0.82	0.67
4	私が女の子っぽいスポーツや遊びをする際、友人たちからの視線が気になっていた。	0.79	0.62
5	私が女の子っぽいスポーツや遊びをしていたら、親は私のことを変わった子だと感じていただろう。	0.77	0.60
2	周りの友人たちは、男の子は男の子らしいスポーツや遊びをすべきだと考えていたと思う。	0.69	0.48
1	私の親は、私に男の子は男の子らしいスポーツや遊びをしてほしいと考えていたと思う。	0.60	0.36

$\alpha=0.82$

2. 方法

1) 調査対象

研究 I と同一の対象者に対して、同様の Google フォームを用いたインターネット調査を行った。

2) 調査内容

(1) スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識: スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識の程度を測定するために、研究 I で開発した六項目から構成されるスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度を用いた。

(2) スポーツ種目のジェンダー・ステレオタイプ: 「あなたが小学生の時の思い出して教えてください。あなたは、以下のスポーツについて、どのような印象をもっていましたか。」という質問に対して、「男性らしい」「女性らしい」「どちらでもない(中性的)」の中から一つ選択させた。スポーツ種目は、バレエ、ダンス、サッカー、野球、ソフトボール、水泳、テニス、バスケ、バレー、柔道、空手、剣道、陸上競技、バドミントン、新体操、卓球、ラグビーの 17 種目が提示された。

(3) スポーツ種目の実施経験の有無: 「あなたが、小学生の時に、以下のスポーツの中で一度でも行ったことがある種目全てに○をつけてください。ただし、学校の体育授業で行ったものは除外して、スポーツ・クラブや友人との遊びなど自ら行った種目だけを回答してください。」との質問に当てはまる種目をすべて回答させた。提示した種目は、上記 (2) スポーツ種目のジェンダー・ステレオタイプの質問と同様の 17 種目であった。

3) 調査期間

研究 I と同時に実施した。

4) 分析方法

各スポーツ種目のジェンダー・ステレオタイプの分類については単純集計を行い、各種目別にジェンダー・ステレオタイプごとの度数を比較して過半数以上の回答を得たジェンダー・ステレオタイプをその種目のタイプとみなした。スポーツ種目ごとの実施人数の性差については χ^2 検定を行った。効果量は Cramer's V を算出した。効果量の基準は、効果量小: $V=.10$ 、効果量中: $V=.30$ 、および効果量大: $V=.50$ とした (Cohen,1992)。有意水準は、5%未満を有意とした。

5) 倫理的配慮

倫理的配慮については研究 I と同様である。

3. 結果・考察

スポーツ種目のジェンダー・ステレオタイプについては、サッカー、野球、柔道、空手、剣道、ラグビーの六種目が「男性らしい」、バレエ、新体操の二種目が「女性らしい」、ダンス、水泳、テニス、バスケ、バレー、陸上競技、バドミントン、卓球の八種目が「中性的」に分類された。競技人口の多い球技や武道は男性的とみなされやすく、審美性を重視する種目は女性的であるとみなされやすい結果となった。90%以上の者が中性的であると判断した種目は、水泳と卓球の二種目であった。また、回答が分散し、ジェンダー・ステレオタイプの分類の判断が難しかった種目はソフトボールであった (男性らしい=19.4%、中性的=39.7%、女性らしい=40.9%)。

同様の手続きで 30 種目を分類した米国の先行研究 (Schmalz & Kerstetter, 2006) では、八割の種目 (24 種目) が「中性的」に分類されていたが、研究 II では「中性的」と判断された種目は五割弱にとどまった。この「中性的」と捉えられた種目の割合の日米の差について、両国のジェンダーに対する考え方の違いが大きく関わっているものと思われる。つまり、米国では、全ての州で同性婚が認められていたり、LGBTQ+の権利が広く受け入れられているなど、わが国と比較してジェンダーに対する考え方が先進的であることが影響していると考えられる。また、もう一点、先行研究では 30 種目を分類の対象にしていたのに対して、研究 II では日本で十分に認知されている 17 種目しか対象にしていなかった。そのため、先行研究と同様にわが国ではマイナーな種目も含めて分類した場合、異なる結果になったかもしれない。

次に、スポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度の得点について、性別とスポーツ種目の実施経験の有無を独立変数とする二元配置の分散分析をスポーツ種目 (17 種) ごとに行った (表 3 参照)。その結果、すべての種目において有意な性の主効果が認められ、男子は女子に比べて有意に高いスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識得点を示していた。このことから、男子は、女子よりも幼少期に周囲の者から「男子は男子らしいスポーツを行うべき」という社会的規範を強く感じていることが明らかになった。この原因については、女性は男性らしい行動 (つまり、女性らしさからの逸脱) が社会から受け入れられやすいのに対して、男性の場合は、女性らしい行

表2 スポーツ種目とジェンダー・ステレオタイプの関係

種目名	男性らしい	中性的	女性らしい
バレエ	1 (0.3)	38 (11.5)	291 (88.2)
ダンス	4 (1.2)	221 (67.0)	105 (31.8)
サッカー	292 (88.5)	38 (11.5)	0 (0.0)
野球	313 (94.8)	17 (5.2)	0 (0.0)
ソフトボール	64 (19.4)	131 (39.7)	135 (40.9)
水泳	19 (5.8)	310 (93.9)	1 (0.3)
テニス	25 (7.6)	286 (86.7)	19 (5.8)
バスケ	106 (32.1)	218 (66.1)	6 (1.8)
バレー	6 (1.8)	194 (58.8)	130 (39.4)
柔道	237 (71.8)	92 (27.9)	1 (0.3)
空手	198 (60.0)	130 (39.4)	2 (0.6)
剣道	173 (52.4)	156 (47.3)	1 (0.3)
陸上	35 (10.6)	293 (88.8)	2 (0.6)
バドミントン	3 (0.9)	247 (74.8)	80 (24.2)
新体操	18 (5.5)	115 (34.8)	197 (59.7)
卓球	17 (5.2)	297 (90.0)	16 (4.8)
ラグビー	319 (96.7)	11 (3.3)	0 (0.0)

() = %

動(つまり、男性らしさからの逸脱)が社会的に受け入れられ難い傾向にあることが関係していると思われる (Schmalz & Kerstetter, 2006)。

また、空手については有意な実施経験の有無の主効果も認められ、空手経験者は未経験者に比べジェンダー・スティグマ意識が高いことが明らかになった。この空手経験者のジェンダー・スティグマ意識が性別によらず高かった原因については、空手という種目が武道としての荒々しい特性(男性的)を持つ一方で、型や作法などの優雅な特性(女性的)も有

していることが影響しているのではないかと考えられる。さらに、野球と陸上競技において、性別と実施経験の有無の有意な交互作用が認められた(野球: $F(1/326) = 6.27, p < .05$, 効果量 偏 $\eta^2 = 0.02$; 陸上競技: $F(1/326) = 7.10, p < .01$, 効果量 偏 $\eta^2 = 0.02$)。この結果から、野球と陸上競技の2種目は、男子の場合は実施経験のある者が実施経験のない者より、女子の場合は実施経験のない者が実施経験のある者よりジェンダー・スティグマ意識が高いことが明らかになった。野球については、いまだに中学校・高校・大学に女子野球部がほとんどないことから伺えるように、わが国においては昔から「野球は男性のスポーツ」という固定観念が強く、実施経験のある男子と同様に実施経験のない女子もジェンダー・スティグマの影響を強く受けているのではないかとと思われる。逆に、野球の実施経験のある女子は、ソフトボールという類似の種目があるにもかかわらず、野球を選択していることからジェンダー・スティグマ意識が低い(もしくは、ジェンダー・スティグマに抗っている)可能性が伺える。陸上競技についても、女子の場合はジェンダー・スティグマ意識が高いほど実施経験が低かった。陸上競技のジェンダー・ステレオタイプは「中性的」と判断されていたにもかかわらず、ジェンダー・スティグマ意識が実施経験と関連していたことから女性のスポーツ参加を促す際には特に注視しなければならない種目といえる。小学生時に体育授業以外で陸上競技を経験する機会は、主にクラブ活動(スポーツ少年団やスポーツ・クラブ)に限られてくるので、そこへの加入には子ども本人だけではなく保護者の態度も関わってくる。つまり、子どもに「女の子は女の子らしく」といった保守的な社会的規範(ジェンダー・スティグマ)を持つ保護者の場合、陸上競技クラブのような競技性の高い団体に子どもを加入させるものはないのかもしれない。

まとめ

本研究の結果をまとめると、一部のスポーツ種目において、ジェンダー・スティグマ意識と実施経験の間に有意な関係があることが明らかになった。よって、スポーツにおけるジェンダー・スティグマ意識(つまりは男性なら男性らしいスポーツ、女性なら女性らしいスポーツをしてほしいという周囲の期待に対する意識)を解消していくことが女性のスポ

表3 性およびスポーツ種目の実施経験によるスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度得点の差異

種目	性別	経験なし	経験あり	性の		経験の		性×経験の	
				主効果	効果量 偏 η^2	主効果	効果量 偏 η^2	交互作用	効果量 偏 η^2
バレエ	男子	14.69 (5.41)	20.00 (-)	8.16*	0.02	0.96*	0.00	1.24	0.00
	女子	10.28 (4.48)	9.94 (3.15)						
ダンス	男子	14.73 (5.23)	14.67 (6.58)	43.79***	0.12	0.40	0.00	0.29	0.00
	女子	10.54 (4.55)	9.74 (4.04)						
サッカー	男子	13.71 (5.35)	14.85 (5.42)	30.63***	0.09	0.34	0.00	0.98	0.00
	女子	10.40 (4.31)	10.10 (4.45)						
野球	男子	13.14 (4.89)	15.23 (5.49)	46.05***	0.12	0.87	0.00	6.27*	0.02
	女子	10.52 (4.29)	9.56 (4.54)						
ソフトボール	男子	14.22 (5.21)	15.42 (5.64)	56.83***	0.15	0.71	0.00	1.23	0.00
	女子	10.28 (4.29)	10.12 (4.79)						
水泳	男子	13.45 (5.49)	15.02 (5.37)	33.07***	0.09	0.51	0.00	2.76	0.00
	女子	10.73 (4.64)	10.10 (4.3)						
テニス	男子	14.44 (5.55)	15.33 (5.1)	57.47***	0.15	0.39	0.00	0.66	0.00
	女子	10.27 (4.32)	10.16 (4.61)						
バスケ	男子	14.37 (4.87)	14.86 (5.62)	58.74***	0.15	0.07	0.00	1.25	0.00
	女子	10.62 (4.51)	9.83 (4.20)						
バレー	男子	14.87 (5.40)	14.55 (5.45)	70.20***	0.18	1.71	0.00	0.52	0.00
	女子	10.71 (4.59)	9.61 (3.99)						
柔道	男子	14.75 (5.43)	14.25 (5.42)	12.36***	0.04	0.85	0.00	0.35	0.00
	女子	10.30 (4.40)	8.00 (1.83)						
空手	男子	14.52 (5.41)	16.5 (5.24)	20.62***	0.06	4.90*	0.01	0.02	0.00
	女子	10.09 (4.28)	12.31 (5.14)						
剣道	男子	14.81 (5.45)	13.5 (4.97)	5.46*	0.02	1.18	0.00	0.33	0.00
	女子	10.27 (4.37)	6.00 (-)						
陸上	男子	14.07 (5.20)	15.86 (5.62)	73.32***	0.18	0.11	0.00	7.10**	0.02
	女子	10.56 (4.37)	9.18 (4.27)						
バドミントン	男子	14.54 (5.67)	14.85 (5.26)	66.02***	0.17	0.23	0.00	0.00	0.00
	女子	10.12 (4.43)	10.34 (4.35)						
新体操	男子	14.73 (5.41)	0.00 (-)	62.97***	0.16	1.24	0.00	0.00	0.00
	女子	10.37 (4.44)	8.86 (3.37)						
卓球	男子	14.74 (5.67)	14.72 (5.25)	63.09***	0.16	0.02	0.00	0.03	0.00
	女子	10.19 (4.20)	10.36 (4.74)						
ラグビー	男子	14.72 (5.44)	15.00 (4.55)	8.65**	0.03	0.20	0.00	0.35	0.00
	女子	10.28 (4.40)	8.33 (2.08)						

() = SD . * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$

ーツ実施率の向上につながる可能性が示された。

ただし、本研究は中国地方の国立大学一校の大学生のみを対象としているため、今後はより多様な対象者で検討することが必要である。また、本研究で開発したスポーツ・ジェンダー・スティグマ意識尺度についても、親からの影響に関する項目と友人からの影響に関する項目の二つに分かれていたにもか

かわらず、分析の際に個別の影響については検討しなかった。親からの影響と友人からの影響を分けて分析することで家庭環境（親）と友人環境のどちらの影響がより強かったのかなどを詳細に検証することができたかもしれない。今後、これらの限界を改善した上でさらに研究を進めることが求められる。

利益相反

本研究について申告すべき利益相反企業はない。

付記

本研究は、2021年度山口大学教育学部保健体育選修卒業研究「スポーツにおけるジェンダー・ステイグマ意識と実施経験の関係」（桑重千聖 著）の一部に加筆・修正を行ったものである。

引用文献

- Cohen, J. (1992) A power primer, *Psychological Bulletin*.112(1): 155-159.
- Pinel, E. C. (1999) Stigma Consciousness: The Psychological Legacy of Social Stereotypes, *Journal of Personality and Social Psychology*. 76(1): 114-128.
- Schmalz, D., & Kerstetter, D. (2006) Girlie Girls and Manly Men: Children's Stigma Consciousness of Gender in Sports and Physical Activities, *Journal of Leisure Research*. 38(4): 536-557.
- Sports England (2021) Go where women are (https://sportengland-production-files.s3.eu-west-2.amazonaws.com/s3fs-public/insight_go-where-women-are.pdf) (2021年5月アクセス)
- スポーツ庁 (2021) 令和2年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」について (https://www.mext.go.jp/sport/b_menu/houdou/jsa_00069.html) (2021年5月アクセス)
- スポーツ庁 (2021) 第2期スポーツ基本計画について (https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/gaiyou/1382785.htm) (2021年5月アクセス)

(2022年6月13日受理)